

(第 25 回 : 2021 年 5 月)

## フランス文化の薫る街モンリオール (その 2)

在外公館の館員にとっては着任直後と離任直前が最も忙しい時期。着任初日こそきうきした気分になりますが、着任時にはできる限り短期間で生活の立ち上げを行い、早々に仕事に専念できるような体制を整えなければなりません。モンリオールでも、到着した翌日から早速様々な着任の手続きに入ることになりました。

### 快適な住居

着任して真っ先に始めたのが住居探しでした。当時の住居探しで頼みの綱は、新聞の classified ads と呼ばれる求人、求職、不動産売買、中古物品売買などが掲載されている広告欄の中にあった賃貸物件案内でした。現在では、海外での賃貸物件探しは不動産業者を介して探すのが一般的で、物件情報もインターネット上での閲覧が主流となっており、新聞の広告欄での不動産情報はあまり目にしなくなりましたが、インターネットの発達していなかった 1980 年代までは新聞で物件を探すのが最も一般的なやり方で、イスラエル、アンカレッジでも新聞情報が決め手でした。

住居の探し方は、新聞の広告欄に掲載された物件の管理事務所に片っ端から電話をかけまくるといふ、いわばアナログ式のやり方でした。その結果、集中的に 10 数件の物件を見た上で、数日のうちに条件に見合う候補物件が見つかりましたが、短期間で決めることができたのは幸運でした。入居を決めたアパートの建物は、アンカレッジの木造建築とは異なり 20 階建ての巨大な賃貸専用のアパート・ビル (巨大というのはあくまでも当時の印象ですが…)。建物の 1 階にあった居住者専用入り口には制服を着たドアマンが配置され、住人や来訪者の出入りをチェックしていましたが、まるでホテルの玄関を思わせるものでした。建物の中は、絨毯敷きの内廊下を挟んで両サイドにそれぞれの部屋を配したレイアウトでしたが、これもホテルのような造り。1 つのフロアに 16 室ほどあるアパートで、洗濯乾燥機が 20 台以上も並ぶ専用のコイン・ランドリー室も完備されていました。また、アパートには居住者専用の施設として屋内の温水プールとサウナ付きスポーツジム、地下には駐車場が完備され、さらには外部から一般客も入れるスーパーマーケット、ドラッグストア、リカーストア等の店舗、レストラン、映画館など商業施設が併設されている、当時の感覚としては極めて先進的なアパートでした。最近でこそ、日本でも首都圏などではこのような複合施設を備えたマンション・ビルを時おり見かけるようになりましたが、何しろ 40 年近く前のことでしたから、その当時の日本と比較しても、それまで見たこともない居住環境に目を丸くしたことを覚えています。

入居したのは、アパートの 12 階、1 ベッドルームとリビング・ダイニング、キッチン、バスルー

ムという間取り、広さは70㎡ほどの部屋で独身者にとっては十分に満足する広さでした。建物は、モン・ロワイヤル公園の東斜面からモンリオール中心部を見下ろす坂の中腹に立地していて、市街を一望することができ、バルコニーからは遠くセントローレンス川の流れを覗くことができる眺めの良さも気に入りました。

北米本土の賃貸住居は、基本的に家具なし住居です（現在でも家具なしが主流）。備え付けの設備といえば、キッチンの調理用電気コンロ、冷蔵庫、オーブン、食洗器、ディスパーザーだけで、それ以外は部屋に何もありません。住居を契約すると、直ぐにダイニングセットやソファ、ベッド、寝具、カーテン、鍋窯から食器などに至る家財道具一式や冬服などを調達するために、昼休みや就業後にクリスマス・ショッピングの人出で賑わう街中のデパートや専門店を走り回りました。モンリオールのダウンタウンはテルアビブやアンカレッジに比べて格段に大規模で、繁華街にはデパートが5店舗、目抜き通りに軒を並べる専門店の数も多く、当時の感覚としては必要な物はお金さえ出せば何でも手に入ると思えるほどに種類も量も豊富にあり、さすが北米の大都会はモノの豊かさのスケールが違うと思ったものです。ただし、当方の財布の中身は寂しいものでしたから、高価な家具などは買えません。最低限の家財道具を購入しただけでも大変な散財となって、車の購入資金を除くと銀行口座の残額は底をついてしまい、次の給料が振り込まれるまでは大人しくせざるを得ない状況でしたが、これで生活の基盤が一応整いました。

## 防寒対策

モンリオールは、北緯45度30分で北海道の稚内とほぼ同緯度に位置し、冬の寒さが厳しいことでは定評があります。冬期は、11月中旬ごろから4月上旬ごろまで約5~6か月ほど、厳冬期には気温が零下30℃近くにまで下がり、セントローレンス川も川幅の3分の1ほどは兩岸が凍結します。それほどに長く寒い冬ですから、充実した日常生活を過ごすにはこの寒さとうまく付き合っていくことが肝要でした。

同じような気候のアンカレッジから転勤したわけですが、車以外に移動手段のなかったアンカレッジとは違って、モンリオールはメトロ（地下鉄）やバスなどの公共交通機関が発達しており、街中の移動にメトロなどを利用する機会も多くありました。通勤も、自宅とオフィスの距離が1km程度と近接していたので、気温が零下15℃を下回るような極端な寒さの日や特段の用事がある場合を除けば、平日に車を使用することは少なくほとんど徒歩通勤でした。また、冬の間は家の中に籠りがちだったアンカレッジとは異なり、ダウンタウンでのショッピングやレストランでの食事、映画、スポーツ観戦など行動半径が格段に広がり、冬場も日常的に外を歩くことが多かったので、外出の際の防寒対策は必須でした。

防寒用の靴やダウンジャケット、帽子など、十分な防寒対策をしていなければ外を歩くことはできませんが、そこは冬が長く雪の多いカナダですから、冬物のアパレルや靴は大変充実していましたので、筆者も着任してすぐにダウンジャケットと防寒ブーツを買い求めたものでした。また、雪道を歩くことも多く、革靴を雪から守るためのものとして、靴の上からすっぽりと覆うように履く防水のゴム製オーバーシューズも必需品でした。

ところで、カナダやアラスカではダウンを使用したコートやジャケットは当時から豊富に出回っ

ていたものの、当時の商品はどれもブカブカでファッション性がない上に重たく、まるで寝袋でも着て歩いているようで個人的には好きではありませんでしたが、格好がいいだけでは零下30℃近くにまでなる冬を乗り切ることはできません。それで、仕方なくその寝袋のようなジャケットを着て通勤していたというわけです。その点、最近のダウン製品はコンパクトでファッション性もある上に暖かくて軽く、通気性や防水性など機能的にも優れています。テクノロジーの進化といったところでしょうか。近年は、日本でもカナダ発高級ブランドのダウンジャケットやコートが人気のようで、街中でもよく見かけます。

## 日常の楽しみ方

冬の期間が長いカナダですが、夏になれば気温が30度を超える日もあり、短いながら春、秋のシーズンもあって、季節の変化を肌で感じることができます。4月下旬にはにわかには春めいた気候になり、気温も一気に上昇します。6月終盤から8月いっぱいが夏季、9月下旬から10月初旬は紅葉の季節となります。11月半ばには初雪が降り、それ以降は3月ごろまでが降雪期で、シーズンを通して降雪量が非常に多かったと記憶しています。

モントリオールの四季をエンジョイできたのは、アウトドアでのアクティビティに積極的だったこともあります。春先からは、冬場の根雪が融けた市街地や新緑の公園の中でジョギングを楽しむことができました。春先から秋口にかけては、ゴルフに集中したものです。ゴルフはアンカレッジでも少しは手を染めていましたが、これはほんのお遊び程度、本格的に取り組んだのはモントリオールでした。モントリオール周辺には100カ所近いゴルフ・コースが点在し、そのうちの半分ほどはメンバーでなくともプレーが可能なパブリックコースで、申し分のないゴルフ環境でした。当時、モントリオールには日本人商工会という日系企業の集まりが組織されており、総領事館も会員に名を連ねていましたが、商工会主催のゴルフ・コンペが5月から9月までの間に毎月2回、計10回開催されていました。各回の参加者が70名を超える大規模コンペで、毎回異なるゴルフ・コースが会場となり、厳しいルールと厳正なハンディキャップの設定で定評がありました。コンペには、大手日系企業25~6社の駐在員の大半が参加していたと思いますが、皆が優勝目指して真剣に参加していました。この雰囲気にもこちらも呑み込まれて、在勤2年目には5月から10月までほぼすべての週末を土日ともゴルフに費やし、平日の夜もそれこそ毎日のようにドライビングレンジに通うほどにのめりこんでいました。練習に励んだ成果もあってか、この年はコンペで優勝2度、2位が2度と満足できる結果を得ることができました。もっとも、練習の熱も長くは続かず、3年目以降は練習量の減少と共にコンペの成績も徐々に下降気味になり、しまいには鳴かず飛ばずの成績になってしまいましたが… それでも、春先の新緑の中や紅葉の季節の山岳コースでのプレーなどでは、ゴルフのスコアは別にしてもケベックの美しい自然を十分に堪能できたように思います。

冬場のアクティビティは、何といてもスキーです。周辺には日帰りが可能なスキー場が20カ所ほどはあったと思いますが、気温の低すぎない日を選んで週末スキー場に通り、平日も仕事が終わる日にはオフィスから車で40分ほどのスキー場に直行してナイト・スキーを楽しむことができました。また、自宅から車で20分ほどの近郊にあるテニスクラブの会員になりましたが、ここにはアウトドアのコートの外に10面ほどのインドアのコートがある施設が併設されており、1

年を通してテニスを楽しむこともできました。とにかく、当時は日々何かしら体を動かすことをしていたように思います。ただし、スキーとテニスは全くの自己流だったため、元来の運動神経の鈍さとも相俟って技術の方はサッパリ上達しないままでした。今になって思えば、インストラクターに教えを乞うくらいの謙虚な心掛けがあればもっと上達したのにと、少し後悔しています。

夏場の野球観戦も堪能しました。本場の MLB（メジャーリーグ）です。モンリオールには、当時 MLB のエクスポスというナショナル・リーグの球団がありました。カナダにあった 2 つの球団のうちの一つです（もう一つの球団はトロント・ブルージェイズ）。球団の歴史は新しく 1969 年に創設、球団名は 1967 年に開催されたモンリオール万博（EXPO）に因んでエクスポス、当時のホームスタジアムは 1976 年に開催されたモンリオール・オリンピックのメイン競技場で、後に巨人でプレーしたクロマティ選手やガリクソン投手などが全盛期に所属していた球団として知られています。彼らのプレーをリアルタイムで見ることができたことは思い出深いものです。他方、フランス系市民にとって野球はポピュラーなスポーツにはなり得なかったようで、チームの成績がいい時は観客もそれなりに入りますが、成績が下降するとファンはそっぽを向いて球場はガラガラ、4 万人以上収容の球場に数千人しか入らない試合の日もあるなど、閑古鳥が鳴いている状態でした。後年、何人もの有力選手がチームを去って成績が低迷すると、球団は経営不振に陥って売却され 2005 年に本拠地をワシントン D.C. に移転することになり（ワシントン・ナショナルズ）、エクスポス球団は消滅してしまいました。

一方、野球のシーズンと入れ替わるように、10 月には NHL（北米のアイスホッケー・プロリーグ）シーズンが始まります。NHL は、野球に勝るとも劣らない北米の 4 大プロスポーツ・リーグ（NFL、MLB、NBA、NHL）の一つですが、特にモンリオールはアイスホッケー発祥の地ともいわれているだけあって非常にポピュラーなスポーツです。地元のカナディアンズは、何度もリーグ・チャンピオンに輝いた人気チームでフランス系カナダ人のプレーヤーも多く、こちらの方は野球とは違って市民から絶大な支持を得ていました。氷上の格闘技ともいわれるアイスホッケーは、試合展開が非常に早く息をのむプレーの連続で、間近で見る彼らのプレーは迫力満点です。試合は、20 分単位のピリオドが 3 回行われ、各ピリオド間に 15 分のインターミッションがある形式ですが、観戦中にはスティックから放たれた岩のような硬さのパックが観客席に飛んでくることもあり、ビールを片手にのんびり観戦という野球とは違って、それぞれのピリオドの 20 分間はずっと目を凝らして試合を観戦していたものです。

インドアの娯楽では、映画にはよく出かけたものです。この街は、モンリオール国際映画祭が毎年開催されることもあり、市民の映画への高い関心を反映してか、市内には数十に上る映画館がありました。市内の映画館では、新作のハリウッド映画からフランス、イタリア映画などの外国映画や往年の名画などがあちらこちらで上映されていて、映画好きにはもってこいの環境でした。また、北米はケーブルテレビが一般に普及しており、メニューの中には 24 時間流されているニュース（CNN）、スポーツ、映画などの専門チャンネルもあり、映画チャンネルでは封切から 1 年程度の比較的新しい映画も放映されていましたので、悪天候の週末もソファに寝そべての映画視聴で、退屈することはありませんでした。

他にも、常設のモンリオール交響楽団の定期演奏会、バレエ、ジャズ・フェスティバルなど様々な催しが年間を通してありましたが、カナダで最も歴史の古いモンリオール美術館では充実した

所蔵品の常設展示に加えて年に何回か目玉となる特別展も開催されていました。さらには、自動車のF1レース、テニスのカナダ・マスターズが毎年開催されるなど、文化面でもスポーツでもイベントは目白押しで、日常を楽しむのに事欠くことはありませんでした。

こんなことばかり書いていると、「遊んでばかりで、いつ仕事をしていたのか」と非難されそうですが、もちろん仕事は私生活に優先して取り組んでいました。仕事が順調だったから私生活も楽しめたのか、私生活の充実が仕事にいい影響を与えたのかは分かりませんが、とにかく仕事もそれなりに充実していました。その辺りの話はモントリオールの食文化の話と併せて次回ご紹介したいと思います。

おわり

(公財) 栃木県国際交流協会 参与 石塚勇人 (略歴)

1977年外務省入省。外務本省では主に経済協力局、国際協力局で途上国の開発協力を担当。海外勤務歴は、在イスラエル大使館に始まり、在アンカレッジ総領事館、在モントリオール総領事館、在連合王国(英国)大使館、在南アフリカ大使館、在ギリシャ大使館、在ドイツ大使館、在インド大使館、在ニューヨーク総領事館の9公館で計29年間。ギリシャ、ドイツ、インドの各大使館で領事班長を歴任。在ニューヨーク総領事館領事部長を最後に2019年3月退官。同年5月より現職。